

Title	1.概要(X.共用利用研究)
Author(s)	
Citation	霊長類研究所年報 (2006), 36: 94-95
Issue Date	2006-07-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/166302
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

X. 共同利用研究

1. 概要

平成 17 年度の共同利用研究の研究課題は以下の三つのカテゴリーで実施された。

1. 計画研究
2. 自由研究
3. 施設利用

共同利用研究は、昭和 57 年度に「計画研究」と「自由研究」の 2 つの研究課題で実施された。昭和 62 年度からは「資料提供」（平成 14 年度から「施設利用」と名称を変更）を、また平成 6 年度からは「所外供給」（平成 14 年度から「所外貸与」と名称を変更し、平成 15 年度で終了）を新設し、現在に至っている。それぞれの研究課題の概略は以下のとおりである。

「計画研究」は、本研究所推進者の企画に基づいて共同利用研究者を公募するもので、個々の「計画研究」は 3 年の期間内に終了し、成果をまとめ、公表を行う。

「自由研究」は、「計画研究」に該当しないプロジェクトで、応募者の自由な着想と計画に基づき、所内対応者の協力を得て、継続期間 3 年を目処に共同研究を実施する。

「施設利用」は、資料（体液、臓器、筋肉、毛皮、歯牙・骨格、排泄物等）を提供して行われる共同研究である。

平成 17 年度の計画課題、応募並びに採択状況は以下のとおりである。

(1) 計画課題

(課題推進者のうち下線は代表者)

1. 野生霊長類の保全生物学

実施予定年度：平成 15 年度～17 年度

課題推進者：室山泰之、川本芳、毛利俊雄、杉浦秀樹

野生霊長類保全生物学の新展開をはかる。個体群管理や被害管理に関する研究を推進するだけでなく、地理情報システム(GIS)を用いた生息地評価や分布変遷も検討する。また、移入種問題も含めて個体群保全に向けた遺伝学や形態学手法の応用を検討する。

2. 霊長類の発達加齢に関する多面的研究

実施予定年度：平成 15 年度～17 年度

課題推進者：太石高生、林基治、清水慶子、脇田真清

発達および加齢の過程ではさまざまな身体的、行動的な変化が生じる。ヒトを含めた霊長類の発達と加齢を分子、細胞、器官、行動などの多様な視点から解析し、変化の本質の究明と、メカニズムの解明をはかる。

3. チンパンジーの認知や行動とその発達の比較研究

実施予定年度：平成 16 年度～18 年度

課題推進者：松沢哲郎、濱田穰、友永雅己、田中正之、泉明宏

チンパンジーをはじめとする類人猿の認知や行動について、形態学的・生理学的研究と関連させ、発達の変化にも着目した幅広い視点で研究する。基礎的な知覚・認知機能、姿勢・運動機能、コミュニケーション、社会的知性などを他の霊長類と比較しつつ検討する。

4. アジアに生息する霊長類の生物多様性と進化生物学

実施予定年度：平成 16 年度～18 年度

課題推進者：平井啓久、正高信男、渡邊邦夫、田中洋之、高井正成

マカクならびにテナガザルをはじめとするアジア霊長類の生物多様性を、遺伝・生態・行動・形態・生理の領域から多角的に分析し、種分化に関わる進化生物学的考察を行う。

加えて、保全計画に資する生命資源の確保と技術革新を目的として、精子および遺伝子試料を収集し、その保存および利用に関する研究も推進する。

尚、当該計画研究は平成 16 年度に発足した流動部門多様性保全研究分野が進める研究に連携して行われる。

(2) 応募並びに採択状況

平成 17 年度のこれらの研究課題について、100 件(148 名)の応募があり、運営委員会共同利用研究専門委員会(寺尾恵治、諏訪元)並びに共同利用研究実行委員会(渡邊邦夫、濱田穰、平井啓久、田中正之)との合同会議において採択原案を作成し、協議委員会(平成 17 年 2 月 9 日)の審議・決定を経て、運営委員会(平成 17 年 3 月 30 日)で了承された。

その結果、95 件(129 名)が採択された。各課題

についての応募・採択状況は下記のとおりである。

課題	応募	採択
計画研究1	7件 (8名)	7件 (8名)
計画研究2	4件 (6名)	4件 (6名)
計画研究3	10件 (11名)	10件 (11名)
計画研究4	5件 (8名)	5件 (8名)
自由研究	38件 (68名)	36件 (52名)
施設利用	36件 (47名)	33件 (44名)

2. 研究成果

(1) 計画研究

1-1 ニホンザルの食物パッチ利用に対する食物環境と他個体の存在の影響

風張喜子(北海道大・院・環境科学)

対応者：杉浦秀樹

前年度の研究により、食物環境だけではなく順位や伴食個体の存在などの社会的要因が、ニホンザルの食物パッチ利用に影響を及ぼすことが明らかになった。しかし、観察時期が限られ、また食品目ごとに分析が行われており、彼らのパッチ利用の全体を理解できたとは言えない。統一的な理解を進めるために、本研究では、食物資源の分布・量・質が異なる様々な時期に、食品目の栄養価を考慮しながら、食物環境と他個体の存在がパッチ利用に及ぼす影響を評価することを目的とした。宮城県金華山島のニホンザル B1 群を対象とし、食物環境の異なる時期ごとに約 1 ヶ月ずつ、計 6 回の調査を行った。様々な順位のオトナメスのパッチ利用(採食品目・取り込み食物数・食物取り込み時間・食物探索時間・滞在時間)、食物環境(パッチの位置・サイズ・食物密度)、社会的要因(順位・伴食個体・攻撃的交渉)を記録した。これらのデータと、今後行う食物資源の分布調査の結果をあわせて、食物環境(パッチサイズ・パッチ内食物密度・食物分布)および社会的要因が、栄養量の取り込み時間・取り込み量・食物探索時間・パッチ滞在時間に及ぼす影響を分析する予定である。

1-2 ニホンザルの休息場所および泊まり場選択に関する要因の評価

辻大和(東京大・院・農学生命科学)

対応者：杉浦秀樹

昨年度に引き続き、ニホンザルの泊まり場の選択と温度環境の関連性を検討した。宮城県金華山島北西部の様々な地形 10 箇所(尾根×3、沢×3、海岸、シバ群落、シキミ群落、スギ群落)に温度データロガーを設置し、2005 年 8 月 11 日から 2006 年 3 月 21 日にかけて気温を記録した。温度の記録期間中、調査対象とした群れは沢を泊まり場とすることが多く(53 日中 41 日)、また季節ごとに分けると夏(8 月)は 5 日中 3 日(60%)、秋(9-11 月)は 38 日中 30 日(79%)、冬(12-3 月)は 10 日中 7 日(70%)と、昨年度とは異なり季節の違いはあまり見られなかった。データロガーのデータと風速のデータよりサルの体感温度を推定した結果、沢ではそ